

あそび

5

2023



寄稿

亀田虎童子

潮の香のつかず離れず干鰈

たはむれに香水の霧軍服に

一八八八年「題詠しりいず『香』より

五月集

をはる

佐藤 竹僊

冬をはる黄になるまへに渡らねば

おそろしきものひとつに追儼聲

高かひくのありてめをとの絲ざくら

なんとなく車が混んで櫻の芽

笹かれひ尾鰭焦がしてなくなれり

地下街の濡れしは春の雪ならむ

青野へと畳の縁を踏まぬやう

あれがさう地球の影が春月に

テフロンはもちろん迂る寒玉子

恐竜はこのごろおしやれ新学期

チューリップ赤には赤い日が差して



春多様

七郎衛門吉保

三・一一国旗に喪章の大手町
氷上に語り継ぐ春十二年
二刀流つらつら椿のドームかな
春北斗八冠目指す五冠かな
瀬戸の春色香あまたやオリーブ油
遠霞瀬戸の小島のカフェオーレ
壇の浦かはらけの的山桜
闘ひを捨てし春闘死語近し

一步

篠田純子

腿トンと叩き一步を春塵へ
柳の芽ひと雨に伸び晴に伸び
柳の芽伸びてやはらな風に添ひ
初桜違法駐車ヘクラクション
墨堤の花は二分なり長命寺
浜防風の浸しほろ苦削り節
茎立や腹八分では肥れない



卒業

篠田大佳

春風に弾む童謡長命寺
卒業式答辞に涙声の混ざる
卒業生へ駅員からのメッセーシ
旅人の笑みの寂しさ春夕
禁猟の標識錆びぬ古利根ぞ
花冷や魔羅寄りかかる古社の殿
古き句碑はやがて捨てられ花曇
掃く春や一筆箋は昭和製

蝶の昼

須賀敏子

梅香る村の外れの登山口
斑雪今日登りしは釜戸山
初めての写経終はりし蝶の昼
花を待つ土手すっきりと草刈られ
まだ細き枝を剪定さくらんば
春の雪都心は何時も工事中
侵略のニュースばかりや春炬燵
はれやかに咲月高校卒業す



花満開

都築繁子

古民家の道具に記憶日脚伸ぶ
廃校の静もる校庭桜咲く
友の訃や白木蓮の暮れなづむ
緋毛氈呈茶券持つ花の下
飽かず見る枝垂れ桜や我が余生
花満開青銅屋根と空の青



初蝶

長崎桂子

梅園や噎せる香りの宙に居て
紅うす紅白咲き匂ふいま盛ん
田植機のはや出勤やご満悦
風かすか早苗のゆるる水鏡
胸苦し目覚めの春暁花粉症
しる海老や「今年こそ」と漁夫の声
初蝶来上下左右に植込を
白と黄の初蝶や石燈籠めぐり



雑詠

森なほ子

名を知らぬ春の小川の水濁る
老梅に猷めきたる幹ありぬ
後ろから呼ばれたやうな桃の花
真夜降りて朝日に消えて春の雪
春の暮雪国の子の外遊び
指先に繋がる誰か夕桜
桜咲く空がきれいで風きれい



小豆島

赤座典子

春暁やサンライズ瀬戸揺れに揺れ
多島海すっぱり覆ふ春霞
岩海苔煮る島の醤油の甘きかな
賑ひのエンジェルロード春休
遍路道白なびかせて下り来る
月桂樹の間の桜や小さき花
壺井栄文学館に花菜風
三月や震災番組くりかへす



切通し

秋川 泉

書き初めの天空を舞ふどんど焼き

臘梅の香は赤土の舞ふ中に

飲み干してひと息つくや寒卵

窓白くジャムの香にある冬林檎

雪の午後ひりひりとかむ生姜糖

雪の舞ふ闇より深き切通し

降りしきる雪にうもれる切通し

出口失せ雪雪雪の切通し



三月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

絵ごころのなかりし絵にも春の風

亀田虎童子

私の絵を見て作られた句かと疑った。長女が幼児の頃に詠んだへ子に描きし象にルビ振るゝといふ句をおもひだした。この句の通りで象を描いたのだが子が首をかしげてゐる。そこで掲句のやうにルビを振った。孫とお絵かき遊びをした時も、狐はかう描くのよと手直しされた。拙句の季語を思ひだせない。調べたがパソコンにもない。で以後この句の下五は虎童子さんの「春の風」を戴かせていただくことにした。おゆるしを。(喜孝)

雪晴れや目鼻先立て歩みくる

亀田虎童子

降り続いた雪も止んだ晴れ間を、向こうから来る人、雪溜まりに踏み込まないように神経を集中させて歩いている。その様子を、「目鼻先立て」と言った。言い得て面白い。(なほ子)

寒明けや予定なかりし予定表

亀田虎童子

予定表が白紙という状況は、予定表を拵えるほど忙しさに充実を覚えていて、予定のないことに寂しさを覚える感情があると読みます。人恋しい気持ちは、気分が開けてくる「寒明け」の季

語にも表れています。(大佳)

おそ秋や雨が降るには空が要る

佐藤竹僊

空から雨が降る。確かに目で見れば当たり前なのでしょうけど、当たり前だと思っっていることは当たり前ではないのだと再確認させられます。水は物質としてユニークな特徴を多く持っているというコラムを見た記憶があります。水の循環はそれ自体が奇跡であり、そうした思索に耽るに、晩秋はいい季節であるように思います。(大佳)

音にしてギギギギギ霜柱

佐藤竹僊

霜柱をこのように詠んだ句はないと思う。地中の水分が凍り少しずつ土の表面を持ち上げて、ついに霜柱になる。ギギギギと音なき音をあげながら。一編の童話のよう。(なほ子)

むべなるかな白い御飯と寒卵

赤座典子

卵かけご飯を食べているのでしょうか。メニューだけを見れば、生活を切り詰めているのか、食欲が湧かないのか、少し心配になります。しかし、「宜なるかな」と来て、ご飯のつやと寒卵の冷たさを味わうほどの余裕を見ると、栄養たっぷりなこだわりの食事であるような印象も受けま
す。いずれにしても、一杯の膳をすっかり味わいたい句です。(大佳)

寒三日月刀架にひたと収まれり

赤座典子

「三日月」と「刀」を一句に収める句は予想に反して少くこの句のみであった。「寒三日月刀文の句ふ日本刀 高井修一」。この句は取り合せの句だが、典子さんの句は真つ向から「寒三日月」を詠み込んでられる。「ひたと収まれり」で見事に寒三日月の光の鋭さを見事に詠まれた。(喜孝)

護摩堂の清々しさや初明り

秋川 泉

元旦の護摩堂に薄々と初明りがさす。その清々しさはさぞやと想像する。お寺や神社はそれ自体が浮き世と一線を画する小さな別世界。お寺のお生まれの作者ならではの句である。同時に、正月三日には中華料理が恋しくなる、という句も詠まれているのが楽しい。(なほ子)

癸卯はづみをつけて苦を越えよ

秋川 泉

「みづのとう」は六十年で一めぐりする年の名称。季語ではない。季の言葉でないのだが年頭にそして年賀葉書などによく使はれる。掲句、苦しいこともあるだらうが兎年なのではづみをつけて乗り越えて行かうと「卯」に掛けて述べられた一句。力強い年頭の決意である。(喜孝)

願ひごと多くなりけり初詣

七郎衛門吉保

自分一人の人生であるならば、願ひ事は少ないものです。身辺無事を祈るだけで、さっと終わ

ります。これが家族が増え、友人が増えるほど、願い事が多くなるのも納得です。欲望が多くなつたという読み方よりも、守りたいものが多くなつたという読み方をしたいです。(大佳)

若いころは自己中心的な願ひ事をするのが大方であるが、年を経るに願ひ子の事、孫の事、世の中のことに願ひ事が広がる。而して「願ひごと多くなりけり」である。(喜孝)

大旦 菩提寺の僧笑まひをり
篠田純子

「菩提寺の僧」は、寺の経営状態が不安定で、機嫌が良いか悪いか、落ち着きません。僧が「笑まう」のであれば機嫌が良い時で、檀家としてもほっとします。今年一年、菩提寺は良い年であるようです。(大佳)

寶船神みつしりと乗合へる
篠田純子

密蔵院の『七福神寶絵』を取り出して眺めた。たしかに神様がみつしり。もうこれ以上神様は乗り込むことは不可能な様子。涅槃図の俳句を読むたびにこんな見方があるのかと感心する。それと同じくよくこのやうに詠めるものと感心した。目出度さの増す寶船の一句である。(喜孝)

お正月ぼくもやさしくなりたいな
篠田大佳

あまりに素直な、一人ごとのような句に胸を打たれる。ぼくも、とあるから、誰かやさしい人に触れての句と思われる。やさしくない人はやさしくなりたいとは思わない。やさしいから、もっとやさしくなりたいと思うのだ。お正月は家族、身内と近くなる時。良い季語だと思う。(なほ子)

正月や街懐かしむホームレス
篠田大佳

正月とあるが、仕事始めの日あたり迄のことだらう。子供のころから見知ってゐる街がどんどん変化してゆく。それがお正月になると街そのものがタイムスリップしてしまったやうにおもへるものだ。大佳君のなじみ(?)のホームレスさんがポツリともらした一言を句に詠まれたかのやうだ。私のやうに八十年住みなれた町を離れた者には味はへぬ心の動きである。またそれを思ひ出させてくれた。(喜孝)

初読みは『未来のサイズ』 俵万智
須賀敏子

『未来のサイズ』は未読ですが、書評などにある、俵万智さんの二〇一三年から二〇二〇年が詠まれたという文言が一番目を惹きました。数歌なら歌集未読でも読めますが、嬉しさも悲しさも戸惑いも含めて、その時の人生をパッケージした歌集のようで、読む方としても大変な労力がかつたのだと思いました。(大佳)

寒ぬくし今日は返却本を背に
須賀敏子

敏子さんは読書が大好きと聞く。図書館へはリュックを背負って颯爽と出かける。「図書館」といはず「リュック」ともいはずに、それらのことを読み手に伝える。「寒ぬくし」とあるが、敏子さんなら「寒厳し」でも颯爽と図書館に出かけられることだらう。(喜孝)

いつからか長寿となりぬ福寿草

都筑繁子

「いつからか」が面白い。長寿と言われる人も急にその年になったわけではなく、何歳以上が長寿という基準もない。気がついたら長生きしていたのだ。福寿草がおめでたい。時々びつくりするような若々しい句を作られる作者、その若さが長寿の秘訣と思うのです。(なほ子)

階の手摺りの冷えや参拝す

都築繁子

繁子さんとは杖仲間である。が杖に頼る度合いは私の方が強い。神社のお社は気がつく和小高所に作られてゐるやうだ。神社に石段はつきものである。

石段のはじめは地べた秋祭

三橋敏雄

この句は神社とは云つてゐないが、「秋祭」で神社の石段と知ることができる。繁子さんの「階」は「参拝」で同じくわかる。階を登り始める。迷はず手摺りに頼る。今時木製は少なく金属製がほとんど。足弱の人しか作り得ぬ一句。そして足弱の人が強く同感する一句である。(喜孝)

手入れ良き尼寺にひととき年新た

長崎桂子

尼寺は、句中からその様子を想像することしかできないのですが、手入れの良い尼寺というだけで、格調高いような心持ちがします。年末に忙しく動き回って、年用意の終わったひとときの気分の良さは格別なものとなっています。(大佳)

睦月の卒寿なり全てに感謝の合掌

長崎桂子

桂子さんが卒寿になられた。2023から90を引くと昭和八年か。私は週一回リハビリに通つてゐる。先日隣り合つた女性は大正十五年生まれだとか。リハビリに通ふ必要があるのかとおもへる元気な方である。掲句「全てに感謝」に同感した。事故のことは勿論だが、回想することのすべてに。家族のこと、友人のことと限がない。そこで「全てに感謝」である。(喜孝)

元旦や去年は記憶の中にのみ

森なほ子

過去は記憶の中にしかないという、強い意志を読みます。記憶ははっきりとした感覚とおぼろげな感覚が混在しています。しかし、記録ほど確実なものではありません。確かなはずだけれど、不確かな気もする。「去年」はそんなところに落ち着いてしまったという感慨を句より読み取れます。(大佳)

夏初め豆腐の水を良く切つて
善哉の餅の良く焦げ花の昼
山百合の程良く香る川下り
飾り太刀男はかつこ良く生きよ
桜桃忌雨にはあぢさゐが良く似合ふ
ふきのたう程良く焦げし香をひろぐ
良く嚼んで芳しきかな走り蕎麦
冬ぬくし写生の筆の良く動き
つつじ満開何も彼も良く過ぎし日よ
穀象や切り良く終る時代劇
風鈴市風小気味良く通り抜け
遠富士の良く見える日の月見草
陽だまりに考へる猫行儀良く
裸木に日当り良くて街を行く
薑を良く食べ体調整へり
のど仏良く動くなり自然薯
年の差の程良く集ふ初句会
「明日良くなる」は私の呪文花粉飛ぶ
回転扉首尾良く抜けり秋高し
良く噛んで一言多し蓬餅
観劇の火照りに寒夜心地良く

芝 尚子
東 亜未
赤座 典子
木村茂登子
赤座 典子
森 理和
山莊 慶子
木村茂登子
赤座 典子
木村茂登子
木村茂登子
木村茂登子
木村茂登子
芝宮須磨子
大日向幸江
大日向幸江
赤座 典子
田中 藤穂
篠田 純子
大日向幸江
赤座 典子
東 亜未

敗戦翌日宮城前に佇ちつくす
横
遊び切った寝息の横で毛糸編む
切株の横よりかえる大蛙
熱気球横にながされ秋の風
縦のもの横にもせずこぼれ萩
あかのまま横田めぐみが自殺とは
ひとつづつ横に動きし冬野かな
横になる爺を尻目に柏餅
横長の滝を背にする一人づつ
眇して山車の横笛過ぎにけり
鍵穴の横に斧ふるいぼむしり
墓の横にコンテナ積む駅雪柳
葭戸から茶庭の光横ゆれに
八ヶ岳横雲にのる秋夕日
山裾は横一文字秋燈
長葱の横向いてをり母まろし
甘酒の香を横ぎりし探梅行
着ぶくれてシテのごとくに横を向く
春の闇横へよこへと広がりぬ
横文字の看板横目冬の風
後ずさり横歩きして冬の草
横一文字に秋刀魚焼上がる

田中 藤穂
篠田 純子
河合 笑子
早崎 泰江
赤座 典子
佐藤 恭子
佐藤 恭子
篠田 大佳
赤座 典子
鈴木多枝子
早崎 泰江
篠田 純子
東 亜未
東 亜未
東 亜未
渡邊 友七
斉藤 裕子
東 亜未
鎌倉喜久恵
芝宮須磨子
篠田 純子
竹内 弘子

水槽を真横に鮪の朱き腹
寝返りす横に夫なし除夜の鐘
跳上り横に飛び散る喜雨来たり
ストープの横が大好きストレッチ
思草すつくと立ちて横を向く
牡丹雪横に流され十五階
蓮池潭竜天に登る横に虎
雨に散る紅ばらの横白あぢさゐ
横穴
鎌倉の横穴ぬけて紅梅に
横穴古墳かがんで覗く落葉の香
横顔
櫛巻の似合ふ横顔秋祭
とりすます横顔見せて夕端居
うら若き妻の横顔冬ともし
横切る
昼月を横切るセスナかき氷
入間川横切つてゐる鯉のぼり
物の芽の野辺を横切る高速道
改装の居間横切れる白き蛇
日盛の道を横切る北狐
北狐夏毛佻しく横切れり
早起きの蟹の横切る崩れ築

赤座 典子
斉藤 裕子
長崎 桂子
長崎 桂子
須賀 敏子
石森 理和
七郎衛門吉保
森 なほ子
森山のりこ
篠田 純子
芝 尚子
鎌倉喜久恵
赤座 典子
森 理和
森 理和
赤座 典子
赤座 典子
赤座 典子
須賀 敏子
須賀 敏子
鎌倉喜久恵

霜解道横切る猫のすばやさよ
牡丹雪低く横切る四十雀
新涼や猫は尾を立て横切れり
三輦の電車秋空横切れり
芒の穂庭を横切る逸れ猿
陰となり窓を横切る春の鳥
横坐り
横坐る少女の指のさくらんぼ
秋思の夜癖になりたる横坐り
スカートを上げ花野に横坐り
山吹や句会ほこほこ横坐り
冬草に横坐りせる茶虎猫
横たへ
横たへし腸うごくアルマイル
六月の横たへし身の白さかな
木芽吹き葉を横たへし彼岸花
春愁にあらず老身横たへる
横丁
横丁の古板塀の鳳仙花
横丁の駄菓子屋の閑鯛雲
横丁のもんじや焼屋の鳳仙花
吸上げ井戸のこる横丁夕月夜
秋の雨「思ひ出横丁入口」です

早崎 泰江
森 理和
須賀 敏子
山莊 慶子
森 理和
大日向幸江
後藤 志づ
芝 尚子
芝 尚子
須賀 敏子
大日向幸江
佐藤 恭子
堀内 一郎
田中 藤穂
田中 藤穂
田中 藤穂
芝 尚子
芝 尚子
竹内 弘子
田中 藤穂

秋晴や鍋屋横丁二往復
横丁を出て横丁へ原爆忌
小春日や横丁の御隠居今何処

横書

横書の手紙書きをり十三夜
横書を縦に読みをり年の内

横笛

横笛を水に浸すや風の盆
眇して山車の横笛過ぎにけり
横笛も琴も平家や今日の月

横文字

横文字のタトウの見ゆる荒神興
横文字の看板横目冬の風
横文字のカードが届く十一月

横向く

長葱の横向いてをり母まろし
春近しと言ふに大木横向きじや

横目

秋高し顎を地べたに犬横目
墓守が横目で過ぎる日向水
案内板横目に枯葉枯木道
春の雲横目の鷗船に沿ふ

芝宮須磨子
堀内 一郎
森 なほ子

芝 尚子
竹内 弘子

堀内 一郎
鈴木多枝子
木村茂登子

篠田 純子
芝宮須磨子
竹内 弘子

渡邊 友七
佐藤 恭子

芝 尚子
芝宮須磨子
佐藤 恭子
赤座 典子

予後

蟻の道踏みて揺るる予後の腰
まつさらな簾下ろして予後といふ

汚れ

靴の汚れ一団の着く紅葉宿
うす汚れ固くどつしり残る雪
冬夕焼川の汚れを覆ひたり
雨上り汚れ落せし白木樅
白色の時計バンドのうす汚れ

夜さり

山峡ひの田螺料理や夜さりつつ
淑気満つ弓道場の夜さりかな
神宮へ帰る鴉の夜さりかな

余震

『大辞林』余震の卓に冴えかへる
螢籠深夜の余震揺りてけり
春暁余震に目覚む昨日今日
春の蚊が余震の中を飛んでゐる
まんさくの花の終りの余震かな
をしみなき剪定の音余震あり
ゆらゆらと黄蝶高みに余震かな
余震頻頻離婚届にサインせる
金柑の花の白さや余震あり

渡邊 友七
田中 藤穂

田中 藤穂
長崎 桂子

早崎 泰江
長崎 桂子

堀内 一郎
須賀 敏子
佐藤 恭子

定梶じよう
定梶じよう

山莊 慶子
篠田 純子
早崎 泰江
田中 藤穂
東 亜未
須賀 敏子

葉桜や立ち暗みとも余震とも

四隅

ひとり居の四隅の暮や柿ふたつ
耕して広がる四隅田んぼかな

寄席

はじめの寄席めまぐるし夏羽織
円朝忌谷中の寺の落語寄席
寄席噺に笑つて忘れ夜の秋
出囃子はどろどろどんと夏の寄席
寄席を出て干支の飴買ふ年忘れ
喜寿米寿卒寿集ひて春の寄席
初テレビ七分毎の名人寄席

余生

すみれ花しづかに香を薫く余生
余生なほ生きる証や初桜
茎立やこれからさきは余生とす
雪吊りや余生と云ふもこころまで
こんがりや余生の餅を焼いてゐる
来し方も余生も我が身星月夜
余生とはいつからならむ小豆煮る
枯葉掃くことも余生の励みとし
秒針はいらぬ余生やお茶の花
それぞれに抱へる余生蛭汁

竹内 弘子

後藤 志づ
定梶じよう

赤座 典子
芝 尚子
芝宮須磨子
木村茂登子
藤野 寿子
芝宮須磨子
赤座 典子

関口 ゆき
河合 笑子

芝宮須磨子
後藤 志づ
田中 藤穂

芝宮須磨子
赤座 典子
田中 藤穂

遠藤 実
田中 藤穂

年の暮わが身廻りの余生めく
臘梅や好奇心こそ余生なり

余生とは他人の言ふこと敬老日
郁子の種しやぶつて捨てる余生かな

寄せ書き

古巣には友の寄せ書き壁のしみ

寄木細工

日脚伸ぶ寄木細工の謎解ける

余所

遠余所とおほごゑ放つ花見会
片陰や住んでゐたまち他所の町
余所者にわからぬやうに濃あぢさゐ
他所の子も叱る佃の盆をどり
姉さんと余所のねえさん春の家
余所行きの顔で写つてる七五三
芍薬にひかれて覗く余所の庭
ちんどん屋を追ひ他所の町時雨けり

予想

津波予想図列島をとり巻く春
寒気団来る予想図や大嚏

夜空

火祭の夜空に大き富士の影
パゴダ二塔夏の夜空に映りあふ

鎌倉喜久恵

須賀 敏子
鎌倉喜久恵
篠田 純子

鎌倉喜久恵
森山のりこ

佐藤 恭子
篠田 純子
佐藤 恭子

佐藤 喜孝
木村茂登子

田中 藤穂
篠田 純子

竹内 弘子
大日向幸江

田中 藤穂
佐藤 喜孝

焔収集

大佛をおどろかしたる猫の恋 亀田虎童子

緞帳の菊もあやめも春爛漫 佐藤 竹僊

野遊びや花輪の子山羊従へて 秋川 泉

たはむれて若布をひろふ朝の浜

栗鼠も落つ二尋越ゆる雪の壁 七郎衛門吉保

みちのくに訪ねし外湯氷点下

「さっちゃん」と吾れ乳姉妹豆の花 篠田純子

野遊びや一郎さんのハーモニカ

思ひ出し笑ひの吐息うらけし 篠田 大佳

万雷の拍手の生みし椿かな

ペダル漕ぎ島を巡れば山笑ふ 須賀敏子

梅の花閻魔堂にも光満つ 都築繁子

捕まらぬ詩片きらきら春の雪

冴返る苔もじもじためらふて 長崎桂子

曇天に声を絞りて冬の鳥 森なほ子

紅梅やみな髪長く女の子

帰り来し庭に残雪一摘み 赤座典子

喜孝抄



あとがき

『あを』の用紙

長年使用してきた『あを』の用紙が製造中止になり在庫が異常な値上がり、代わりになる紙を模索中。ネットで探すのは限界がある。洋紙店をさがしてみようと思つてゐる。しばらく違ふ紙で『あを』が届くかもしれない。ご容赦を。

探し物

探し物をした。引越以来開けたことのない箱の中に保存した美しきのない私の手習ひが一束出てきた。びっくりし、喜んだ。今、自作を書いて楽しんでゐる。そこに昔の手習ひの束が出てきた。私にとって宝物だが、子供達には迷惑なごみでしかない。私が片付けなければと焦るが、今のペースでは全く不可能。そんなこんなを考へてゐたら、私自身がごみのやうに思へてきた。

公園のベンチ

二十二頁の書は亀田虎童子さんたちと遊んだ昔を思ひ出して詠んだ一句です。『ボルガ』が閉まると茂さんと俳人たちが『公園のベンチ』で飲んで歌つた。

『公園のベンチ』は中野坂上にあつたカラオケスナックの名称。道を隔てて隣りが公園であつた。同じ様な世代なのでいつも懐メロや軍歌を飽きもせず歌つた。歌つてゐる間はよく聞きもせず、俳句の話をこれまた飽きもせず看板までしたものだ。虎童子さんは酔ふと我関せずとひと眠りのできる得意技を持つてゐた。妻も子供達もよくこのベンチに通つた。先日篠田純子さんからLINEで「高島茂」の特集が掲載された雑誌の「पी」を送つていただいた。それゆゑかつい余計な昔話を書いてしまった。(喜孝)

二〇二三年五月号

発行日 五月十九日

発行所

〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話

090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 45866402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)